



「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

International University of Health and Welfare

vol. 123
December
2020



学会学術大会での記念シンポジウム (大田原キャンパス)

第10回 国際医療福祉大学 学会学術大会

臨床工学特別専攻科2021年4月成田に開設予定
災害保健医療研究センターが本格始動

高木理事長がモンゴル国政府より北極星勲章を受章

第10回国際医療福祉大学学会 学術大会 Zoom中心の新形式で

第10回国際医療福祉大学学会学術大会（大会長：新井田孝裕国際医療福祉大学副学長）を11月8日、大田原キャンパスで開催した。

これまでの学術大会は、会員がメイン会場に一堂に会して、口述発表、ポスターセッション、特別講演等を行う形式だったが、今回は新型コロナウイルスの感染拡大防止を最優先に、テレビ会議システム「Zoom」を中心とした新形式で開かれた。当日はZoomを通じて約340人が参加した。今回のメインテーマは『未来につなぐ「IUHWレガシー」の継承』、サブテーマは「withコロナ時代の学会のあり方とは」。

大友邦学会長は開会式の挨拶の中で、「若手の発表者には、抄録で終わることなく論文にきちんと仕上げ、業績として積み上げてほしい」と述べた。

新井田大会長は、「今年はコロナ禍で多くの学会がオンラインでの開催を余儀な



●新井田大会長



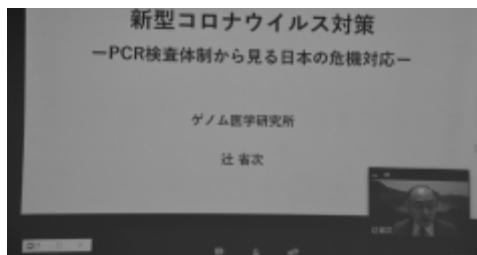
●開会式であいさつする大友学会長

くされているが、会員みなさんにはこの学術大会を通じて、学術交流を進展させて研究の糧にしてほしい」と呼びかけた。

今回は321題の抄録の応募があり、その中から特に優れた10題を当日のプログラムで口述発表したほか、特別講演、シンポジウムなどが行われた。

午後のプログラムは、新型コロナウイルスに対してそれぞれの領域で深く関わっている第一人者が、最前線で活動してきた経験や、今後の展望などを講演した。

特別講演Ⅰではゲノム医学研究所所長の辻省次教授が「新型コロナウイルス対策—PCR検査体制から見る日本の危機対応—」と題して、クルーズ船の乗客乗員に対するPCR検査



●ゲノム医学研究所所長の辻省次教授

「行政の知識不足が検査現場を混乱させた原因であり、当初からコロナ対策の戦略が十分でなかったという認識が欠如していた。必要なのは緊急事態に際して機動的かつ戦略的にどう危機対応できるかである」と語った。

特別講演Ⅱでは、医療福祉学部長の田中秀一教授が「ポストコロナ社会—我々を待ち受ける変容—」をテーマに、新型コロナウイルスがもたらした社会の変化について、「コロナ禍でもグローバル化が後

退することはない。これから感染症に強いしなやかな社会を作っていくためには、平時の備えと有事の行動変容が不可欠である」と訴えた。

続く記念シンポジウムでは、「徹底討論！私たちは新型コロナウイルスとどう向き合えばよいのか」をメインテーマに、4人のシンポジストが各専門分野について講演した。

医学部感染症学の松本哲哉主任教授は、PCR検査対象拡大の必要性や医療機関における感染対策をクリアすべき問題を含めて説明。その上で「PCRなど遺伝子検査は全て正しい結果が出るとは限らない。感染している自覚のない人も伝播させる可能性を有しているため、正しい知識を身に付けて感染対策を徹底してほしい」と呼びかけた。

医学教育統括センター副センター長の矢野晴美教授（感染症学）は、経済発展と社会的課題解決を両立する「Society 5.0」の教育現場での確立について「学生評価アセスメントを戦略的に取り入れて、AIやVRの活用、データサイエンスに基づく習熟度に応じた個別化教育を図ることで、教育の質の向上に取り組むべきだ」と強調した。

医学部公衆衛生学の和田耕治教授は、withコロナ時代に求められ、我々がめざすべき方向について提言。「感染者がいても地域内で感染が広がらない社会作りの推進主体を、政府から地域や市民にシフトしていくことが大切である。また高齢者や重症化リスクの高い人を守っていくことを考え、医療従事者や介護労働者は感染対策を徹底していかなければならない。その上で前向きに明るく、周りと連携、連帯していき、

みんなでコロナを乗り越えていきましょう」と締めくくった。

未来研究支援センターの藤田烈講師は、クルーズ船内で取り組んだ支援活動について「指揮系統が不安定な寄り合い状態であったため、現場は非常に混乱した。検体採取の作業には感染リスクが常に伴い、また外国船籍への立ち入り検疫という特殊な状況でスムーズに進まなかった。感染者やそれ以外の人を分けるゾーニングを、部屋、通路、時間などで可能な限り区別した。支援者の中から感染者が出た場合の対応をどうするべきか苦慮した」と当時の緊迫した状況やさまざまな苦労を振り返った。

すべてのプログラムを通じて、現在世界で最大の関心事である新型コロナウイルスを、テレビや新聞では語られてこなかった面も含め、より深く知ることができただけでなく、この先、我々が取り組んでいかなければならない役割と責任について理解する貴重な機会となった。

（大田原キャンパス総務課 川上二郎）

「学術大会プログラム内容」

●優秀演題口述発表Ⅰ

座長：福岡保健医療学部言語聴覚学科長 爲数哲司

「通所介護を利用する要介護者等の家族介護者における生活満足感について—社会との関わりと看護負担感の関連—」

保健医療学部看護学科 荒川博美

「高齢者におけるフレイルの実態調査と関連要因の検討」

●優秀演題口述発表Ⅱ

座長：医学部副医学部長 吉田素文

「教材用模擬診療記録の作成とその評価」 赤坂心理・医療福祉マネジメント学部 医療マネジメント学科 坂本千枝子

「骨格筋繊維修復に必要なDysfibrinの局在と機能」 成田キャンパス基礎医学研究センター 三宅克也

「血管芽腫の発生における転写経路の解明」 国際医療福祉大学熱海病院脳神経外科 菅野洋

「二次性白血病発症に関わる遺伝子変異の経時的なゲノム解析」 国際医療福祉大学ゲノム医学研究所 野本順子

「遺伝子早老症ウェルナー症候群の加齢性筋萎縮（サルコペニア）の機序解明」 医学部糖尿病・代謝内分分泌学 竹本稔

「新型コロナウイルスの感染拡大防止を最優先に、テレビ会議システム「Zoom」を中心とした新形式で開かれた。当日はZoomを通じて約340人が参加した。今回のメインテーマは『未来につなぐ「IUHWレガシー」の継承』、サブテーマは「withコロナ時代の学会のあり方とは」。

大友邦学会長は開会式の挨拶の中で、「若手の発表者には、抄録で終わることなく論文にきちんと仕上げ、業績として積み上げてほしい」と述べた。

新井田大会長は、「今年はコロナ禍で多くの学会がオンラインでの開催を余儀な

くされているが、会員みなさんにはこの学術大会を通じて、学術交流を進展させて研究の糧にしてほしい」と呼びかけた。

今回は321題の抄録の応募があり、その中から特に優れた10題を当日のプログラムで口述発表したほか、特別講演、シンポジウムなどが行われた。

午後のプログラムは、新型コロナウイルスに対してそれぞれの領域で深く関わっている第一人者が、最前線で活動してきた経験や、今後の展望などを講演した。

特別講演Ⅰではゲノム医学研究所所長の辻省次教授が「新型コロナウイルス対策—PCR検査体制から見る日本の危機対応—」と題して、クルーズ船の乗客乗員に対するPCR検査

「行政の知識不足が検査現場を混乱させた原因であり、当初からコロナ対策の戦略が十分でなかったという認識が欠如していた。必要なのは緊急事態に際して機動的かつ戦略的にどう危機対応できるかである」と語った。

特別講演Ⅱでは、医療福祉学部長の田中秀一教授が「ポストコロナ社会—我々を待ち受ける変容—」をテーマに、新型コロナウイルスがもたらした社会の変化について、「コロナ禍でもグローバル化が後

退することはない。これから感染症に強いしなやかな社会を作っていくためには、平時の備えと有事の行動変容が不可欠である」と訴えた。

続く記念シンポジウムでは、「徹底討論！私たちは新型コロナウイルスとどう向き合えばよいのか」をメインテーマに、4人のシンポジストが各専門分野について講演した。

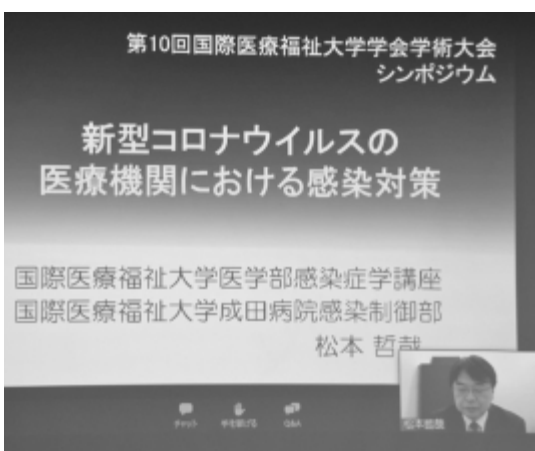
医学部感染症学の松本哲哉主任教授は、PCR検査対象拡大の必要性や医療機関における感染対策をクリアすべき問題を含めて説明。その上で「PCRなど遺伝子検査は全て正しい結果が出るとは限らない。感染している自覚のない人も伝播させる可能性を有しているため、正しい知識を身に付けて感染対策を徹底してほしい」と呼びかけた。

医学教育統括センター副センター長の矢野晴美教授（感染症学）は、経済発展と社会的課題解決を両立する「Society 5.0」の教育現場での確立について「学生評価アセスメントを戦略的に取り入れて、AIやVRの活用、データサイエンスに基づく習熟度に応じた個別化教育を図ることで、教育の質の向上に取り組むべきだ」と強調した。

医学部公衆衛生学の和田耕治教授は、withコロナ時代に求められ、我々がめざすべき方向について提言。「感染者がいても地域内で感染が広がらない社会作りの推進主体を、政府から地域や市民にシフトしていくことが大切である。また高齢者や重症化リスクの高い人を守っていくことを考え、医療従事者や介護労働者は感染対策を徹底していかなければならない。その上で前向きに明るく、周りと連携、連帯していき、



●優秀発表者表彰式



●シンポジウムの様子

●優秀演題表彰者

学会長賞

成田キャンパス基礎医学研究センター 三宅克也

学術大会長賞 保健医療学部作業療法学科 関森英伸

優秀賞 保健医療学部看護学科 荒川博美

保健医療学部理学療法学科 石坂正大

保健医療学部視機能療法学科 内川義和

薬学部薬学科 平尾卓也

赤坂心理・医療福祉マネジメント学部 医療マネジメント学科 坂本千枝子

国際医療福祉大学熱海病院脳神経外科 菅野洋

臨床工学特別専攻科（1年制課程） 2021年4月 成田キャンパスに開設予定

本学では初となる臨床工学技士を養成する「臨床工学特別専攻科」を2021年4月、成田キャンパスに開設する予定だ。

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、医療従事者不足がこれまでになく取り上げられているが、医師や看護師に加えて体外式膜型人工肺（ECMO）等を取り扱う臨床工学技士の重要性も注目されている。臨床工学技士は「医師の指示の下に、生命維持管理装置の操作及び保守点検を行うことを業とする者という」と定義されており、人工呼吸器や人工心肺装置、血液透析装置等の取り扱いや安全管理に携わる専門職であるが、近年は医療機器の高度化やチーム医療の推進、医師の働き方改革の影響もあり、これまで以上にその重要性や取り扱う業務の拡大が期待されている。

国際医療福祉大学では、16年4月、成田キャンパスに臨床検査技師を養成する医学検査学科を成田キャンパスに開設する際、臨床工学技士の養成課程設置の検討を重ねてきた。千葉県には臨床工学技士の養成施設は1校しかなく、国家試験合格者の県別割合も1%にも満たない状態で、特に千葉県における臨床工学技士の不足は深刻な状況。このような社会

情勢に鑑み、臨床工学特別専攻科の開設を決めた。

本学では4年制課程での医療従事者の育成を基本としているが、本専攻科は主に看護学科や理学療法学科、作業療法学科、放射線・情報科学科、医学検査学科の卒業生を対象とした「1年制課程」であることが大きな特徴。臨床工学技士養成の豊富な教授経験や臨床経験を持つ専任教員を迎え、既に医療従事者としての基礎知識や基本的な技能を身につけた人を対象に、1学年20人の少人数教育で高度先進技術に対応できる能力を備え、即戦力となり得る臨床工学技士の養成をめざす（指定学校申請中であり、変更となる可能性がある）。

また、臨床工学特別専攻科の開設に伴い、大学院医療福祉学研究科保健医療学専攻には「医療機器イノベーション分野（修士課程）」を同じく21年4月に開設予定。主に医療施設に勤務もしくは勤務を希望する、診療放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士などを入学対象者として想定している。臨床現場における広範囲の医療機器に関するさまざまな課題をくみ上げ、その解決を通じて医療の質の向上に貢献できる「医療現場からのフィードバックを実装する医療機器開発・管理の専門家」の養成を目的としていく。

（教務企画部 市村恒二）

災害保健医療研究センターが 本格始動

大学院の新しい組織として災害保健医療研究センターが今年4月発足し、活動している。三浦総一郎大学院長がセンター長を務め、災害医療分野責任者の石井美恵子教授、災害拠点病院に指定されている2つの附属病院の医師らで構成されている。

東京赤坂キャンパスは都心の防災拠点としての貢献を約束し、災害時に500人の帰宅困難者を受け入れることになっている。地域の防災イベントへの参加にも力を入れている。キャンパス開設を応募した際に、災害に関する医療・保健の教育・研究や情報発信を行うセンターの設置を提案したため設置に至った。

12月3日に開いたセンターの会議で、三浦大学院長は「災害教育・研究及び地域貢献と合わせグループ全体の防災ネットワーク作りの核となる活動をしていきたい」と述べた。塩谷病院と熱海病院の医師からは防災訓練やDMATチームの派遣で互いに連携しているという報告や「センターが病院職員の人材育成の役割も果たせるとよい」という発言があった。石井教授は「災害医療を系統立つて学び病院の事業継続計画を作る人材を育てるためグループ内からも大学院生を迎えたい。外部の防災機関等と連携した研究も進めたい」と述べ、今後専用のホームページを開設して内外に情報を発信することになった。

【主なメンバー】

三浦総一郎大学院長、石井美恵子教授（副センター長、内海清乃助教、塩谷病院 一瀬雅典副院長、熱海病院 堀内義仁教授、白井博之教授、石和大准教授

東京・港区の 避難所開設訓練で講演

首都直下地震などの大災害の発生を想定し、感染対策を講じながら避難所を開設・運営する訓練が11月15日、東京都港区で行われ、災害保健医療研究センター副センター長の石井美恵子教授が講演した。地域の住民代表の方々など約40人が参加し、石井教授が、「断水時に避難所で手を洗う方法」や、「感染対策上、床に直に寝るよりも簡易ベッドを利用する方法がよいこと」、「避難所の運営に女性が参加すべきこと」、「在宅での避難も重要であること」等を説明した。

感染を防



●講演の様子

福岡看護学部が 福岡国際医療福祉大学へ移管

国際医療福祉大学福岡看護学部を姉妹校の福岡国際医療福祉大学に移管する設置者変更が10月9日、文部科学省から認可された。これにより、来年4月から「福岡国際医療福祉大学看護学部」と名称が変わり、新たにスタートする。今年3月に申請していた。

福岡看護学部はこれまで、本学大川キャンパスと連携してきたが、両キャンパスの距離が離れていることから、学生交流や施設の使用を制限される状況が課題となっていた。学生からも、以前から福岡市内の同じ「ももち地区」にある福岡国際医療福祉大学との連携を望む声が上がっていた。



●移管される福岡キャンパス

福岡国際医療福祉大学は、医療学部にて、理学療法、作業療法、視能訓練の3学科と、大卒者を対象とした2年課程の言語聴覚専攻科があり、福岡看護学部が移管されることで、新たな教育環境が作られることになる。

また、本学は福岡国際医療福祉大学と包括協定を結んでおり、同大学と連携することで、本学の関連職種連携教育がより一層充実したものとなる。

「医学部後期臨床実習」 オリエンテーション実施

国際医療福祉大学病院は11月2日の医学部後期臨床実習の開始に伴い、同日、実習生4年生後期70人を対象に、十分なソーシャルディスタンスを確保した講堂で後期オリエンテーションを実施した。大和田倫孝病院長、大草由美子看護部長、マロニエ苑の浦野友彦施設長のエールに続き、実習生代表の佐山智咲さんが、英語で後期実習に臨む思いを堂々と宣誓。ネイティブかと思うほどの発音に一同は感服。続いて、医療安全、感染対策といった5つの重要事項を説明し、柴信行副院長による「臨床実習全体の心構え」で午前中のセッションが締めくくられた。



●オリエンテーションの様子

午後は、診療の要となる全21の診療科を束ねる8グループの長が、それぞれの診療科群の特徴を踏まえた説明を行った。特に総合診療科については、国際医療福祉大学塩谷病院の須田康文病院長を招き、在宅診療など地域医療の実情を学ぶ1ラウンドを詳しく解説した。

プログラムの最後は、新たに開設した学生センターに全員が移動。その利用方法を説明し、有意義な1日を終えた。

（国際医療福祉大学病院 総務課 中澤彩乃）

特集 第10回 国際医療福祉大学学会 学術大会

トピックス

臨床工学特別専攻科2021年4月成田に開設予定
福岡看護学部が福岡国際医療福祉大学へ移管

医学部後期臨床実習オリエンテーション実施

災害保健医療研究センターが本格始動

東京・港区の避難所開設訓練で講演

高木理事長がモンゴル国政府より北極星勳章を受章

IUHW奨学生が卒業研究最優秀賞受賞

コロナ禍で2021年度入学試験始まる

海外保健福祉事情

オーストラリア／タイ

キャンパスレポート

大田原高等学校の生徒とSSHに関する発表検討会／言語聴覚療法
特論「笑顔の授業」開講／オンラインで保護者懇談会／年間成績優秀者表彰式を開催

成田

留学生別科ウエルカムセレモニーを開催／解剖体慰霊祭並びにご遺骨返還式を挙げる／公開講座を実施

東京赤坂

第3回西陵祭を開催／今年度初めての市民公開講座／
大学院オンラインオープンキャンパスを開催

小田原

グループ関連病院合同就職説明会を開催／年間成績優秀者表彰式／
おだびよサポート活動

福岡

読書感想文表彰式／第1回就職オリエンテーション／
異文化交流ランチセミナー開催

大川

年間成績優秀賞表彰式／大川市が大学生等を応援する臨時商品券交付事業を実施

施設インフォメーション

国際医療福祉大学病院／成田病院／塩谷病院／三田病院／熱海病院／
市川病院／赤坂山王メディカルセンター

キャンパスプラス

クラブ・サークル紹介
折り紙サークル（福岡キャンパス）

高木理事長がモンゴル国政府より 北極星勳章を受章

本学の高木邦格理事長がモンゴル大統領から外国人に授与される勳章の中で最高位の「北極星勳章」を受章し、12月2日、駐日モンゴル国大使館で受勳式が行われた。これは、本学がフルスカラシップの医学部留学生9人を2015年に大学間協定を締結したモンゴル国立医科大学から受け入れて



●バッチジャルガル大使(右)と高木理事長(左)

いることに加え、これまで卒業生を含め12人のモンゴル留学生を看護学科、理学療法学科、視機能療法学科、医療福祉マネジメント

ト学科、医学検査学科、薬学科を中心に同じくフルスカラシップで受け入れていることが高く評価されたためである。

式典では、駐日モンゴル大使のダンバドルジャー・バッチジャルガル閣下から高木理事長のこれまでのモンゴルにおける医療福祉分野における人材育成に対する高い功績が称えられ、「今後もモンゴルの医療福祉分野の発展のために力を貸していただき、さらに日本モンゴルの友好関係を深めていただきたい」と力強く語った。高木理事長からは「現在、本学では公衆衛生学、分子生物学、病理学分野から5人の教員

IUHW奨学生が 卒業研究最優秀賞受賞

が医学部で教鞭を執っており、教育や研究の分野においても連携を図っていききたいと思えます。また、本学はモンゴルで初の大学病院となった日本モンゴル教育病院と18年に覚書を締結しましたが、同病院内に「IUHW教育研修センター」を設置することになっており、さまざまな機会を通じてモンゴル医療福祉の発展のため、これからも尽力していきたい」とお礼の言葉を述べた。

式典には清水武則元モンゴル大使や、国際医療福祉大学三田病院に看護師として勤務する本学卒業生のオクチャビル・バトツンガラグさんらも出席し、終始和やかな雰囲気だった。

保健医療学部言語聴覚学科の卒業研究報告会が11月19日に大田原キャンパスで開催された。発表時間10分、質疑応答5分と学会さながらの報告会だったが、質疑応答の時間が足りなくなるほど熱いディスカッションが繰り広げられた。報告会に先立ち行われた教員による卒業論文審査会の結果と、報告会での参加者全員からの投票結果を合わせて、今年度の卒業研究最優秀賞が決定した。

今年度の卒業研究最優秀賞は、IUHW奨学生でミャンマー出身のカイン・ニン・ピューさんの「The comparison of mastication duration and chewing numbers between Japanese rice and

Myanmar rice in young persons」が選ばれた。ミャンマーも日本も主食が「米」だが、コメの性質(硬さ、粘性、水分量など)が異なる。カインさんは、この点に興味を持ち研究を行い、ミャンマー米は日本米に比し咀嚼回数「咀嚼時間」が有意に多く、口腔内で食塊形成が難しいことを明らかにした。

本研究は、講義で学んだ嚥下調整食や摂食嚥下リハビリテーションを「ミャンマーの食文化」に合わせ導入していくための「第一歩」となる研究。これからも研究活動を続け、ミャンマーでの言語聴覚療法や摂食嚥下リハビリテーションのエビデンスを構築してほしい。



●卒業研究報告会発表者(前列右側がカイン・ニン・ピューさん)

(保健医療学部言語聴覚学科 准教授 平田文)

この度、卒業研究優秀賞を受賞し、喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。言語聴覚学科の先生方、特に親切なご指導をしてくださった指導教員の平田文先生に感謝します。今後も、治療技術の向上とミャンマーの言語聴覚療法の確立のために、研究や勉強に励んでいきます。

(保健医療学部言語聴覚学科 4年 カイン・ニン・ピュー)

コロナ禍で 2021年度入学試験始まる

10月17日の総合型選抜を皮切りに、本学の2021年度入学試験が始まった。今年度も例年通り、対面・来場型の入学試験を実施しているが、新型コロナウイルス感染症防止のため、さまざまな対策をとっている。

試験場では、各試験室の入口に消毒用アルコールを設置し、受験生には入退室、ことに手指消毒をしてもらうように徹底した。筆記試験室の座席間隔は前後1メートル以上、面接試験室は面接員や受験生同士の間隔を2メートル以上確保し、定期的に窓やドアを開けるなどし、換気を行った。また、試験で使用する机や椅子は、試験前日に消毒を行うようにした。



●試験場へ入場する受験生

受験生に対しては、事前に本学ホームページ上で注意喚起を行った。新型コロナウイルスに罹患し、試験日までには医師から治癒したと診断されていない場合や、試験前から継続して37.5度以上の発熱、咳等の症状がある場合などは、受験を控えていただくようお願いをしている。

年明けには一般選抜もあり、多くの受験生が各試験場へ来場する予定だ。今後も感染防止のため、最善の注意を払って試験を実施していきたい。

海外

保健福祉事情



2020年を振り返っても「新型コロナウイルス」しか思い浮かばないほど、この未知なる感染症は私たちの生活のあらゆる場面に及ぼしている。総合教育科目「海外保健福祉事情」海外研修は19年度冬季(20年2月末出発)より中止、20年度は全方面中止となった。本学を含め各国の大学がオンライン教育を導入し、一部の協定校とはオンラインでの交流が実現したことは不幸中の幸いであった(詳細は122号に掲載)。

世界はいまだパンデミックの真ただ中で収束の見通しが立たない状況ではあるが、21年はまた本誌で海外研修の実施報告ができる世の中になっていることを願いつつ、今号では20年1月下旬、世界で感染拡大が懸念され始める直前のぎりぎりのタイミングで実施した海外研修冬季前半の2カ国2グループからの報告を紹介する。

(大田原キャンパス国際室 藤原志保)

オーストラリア

TAFEゴールドコースト

日本との違いを肌で感じた

成田看護学部 看護学科 教授 岡田佳詠

オーストラリアゴールドコーストの研修では、TAFEでのオーストラリアの医療保健福祉事情や認知症の講義(通訳付き)の聴

講、救急救命やバイタルサイン測定、医療器具の演習、他国学生との英語クラスなどの受講など、大変充実した内容であった。学生にはどれも興味関心の高いもので、学生は多くの質問をし、先生方とのコミュニケーションも盛んであった。病院・高齢者施設の見学では、施設設備やスタッフの対応の仕方など、日本との違いを肌で感じ、TOMODACHI HOURでは、利用者に習字を紹介し、日本の歌を披露して、楽しい時間を過ごした。ホストファミリーとの交流も深め、生涯に残る素晴らしい体験ができた。



●aged care施設でのTOMODACHI HOUR

異なる価値観に触れる

成田看護学部 看護学科 3年 今野紗希

オーストラリアでは、医療従事者や介護者の健康・安全・幸福を重視していることを知った。患者の歩行補助をする際は「看護師の安全」のために手の形や位置が決まっている、というお話を聞いたときは、日本の考え方との違いに戸惑った。しかし、何よりもまず、医療従事者や介護者が健康でなければ質の高い医療・介護を提供することができないのだということに気づかされ、良い学びとなった。ホームステイ先では、私が日本では玄関で靴を脱ぐ習慣があることを話すと、ホストファミリーが「自分の家のようにし

タイ

異文化生活からの学び

保健医療学部 看護学科 准教授 荒川博美

タイでの10日間の体験を振り返ると、現地の日常生活において大きな驚きを感じるものがいくつかあった。それはトイレ事情や道路で食べ物を売る露店、普段飲む水事情、室内における虫の出没などであった。異文化と一言で言ってしまうとそれまでだが、初めて遭遇する状況に当然のように戸惑った。しかし、異文化生活に異を唱える学生は1人もおらず、皆徐々にタイでの生活に適応していった。また、文化の1つである言語であるが、タイに来た時と、帰る時を比較すると、学生の語学力の進歩は特筆すべきことである。現地で会話する経験の力の大きさを感じた。



●ワット・マイスプラディッターラーム(仏教寺院)にて

こういった若い時期に異文化を経験することは、将来、医療人として、文化の違う人々

に向き合い、理解し、協働していくために貴重な経験となったのではないかと、さらに、この経験は今後世界を見つめるときの礎になっているのではないかとすら感じた。これらの異文化体験がスムーズに運んだことは何よりホスピタリティあふれる現地教職員のサポート、さまざまな場面で惜しみない支援をくださった本学の支援体制のお蔭であったと感謝する。

医療に対する考え方の違いを実感

成田看護学部 看護学科 3年 飯塚葵

今回、10日間という短い日程で、タイへ研修に行った。タイの医療設備や大学の設備は日本とはあまり変わりはないが、しかし、医療に対する考え方、主に看護に関する考え方に違いがあった。病院についての医療に対する考え方は、それぞれではあったが、共通して言えることは日本よりサービスが充実していると感じたことだ。

クリスチャン大学の看護学生が受けている日頃の授業を見学した。先生方は、わかりやすい英語で講義をしてくださった。また、わからないところは何度も教えてくださった。私たち学生に気軽に接し、質問しやすい環境を作ってくくださった先生や学生の皆さんには感謝している。言語の壁というものは必ずあるが、私たち学生が必死だった英語での会話に対し、先生や学生の皆さんが一生懸命に理解をしてくださった際には達成感を感じた。とても楽しく充実した研修だった。また、コミュニケーションについても学ぶことができ、今後看護師になつてから、どんな患者であっても同じように接して患者の気持ちに誠心誠意寄り添いたいと思った。

第122回 大田原 キャンパスレポート

大田原高等学校の生徒とSSHに関する発表検討会

栃木県立大田原高等学校の生徒16人と引率教員1人が10月20日に来学し、SSH（文部科学省スーパーサイエンスハイスクール）に関する特別課題研究の中間成果発表会に向けたディスカッションを行った。医療福祉マネジメント学科教員3人（山本康弘副学科長・薄井浩信講師・江田哲也講師）が指導や助言を行う講師として携わり、課題研究に係る班別指導の一環として開催された。

高校生と本学4年生及び大学院生（診療情報アナリスト養成分野所属）による合同ゼミナール形式でグループ別に作成した生徒たちのポスター発表が行われた。質疑応答における生徒たちの真摯な姿勢は大学生の刺激につながり、多角的な視点からの意見交換は有意義な学びの時間になった。



●発表する高校生たち

11月10日には、高校において1、2年生に対する中間成果発表会が実施され、審査員として同学科教員が参加した。本学での経験を生かし、聴講する生徒へ堂々たる発表を行っていた。

（医療福祉・マネジメント学科講師 江田哲也）

言語聴覚療法特論「笑顔の授業」開講

令和2年度の言語聴覚療法特論を10月30日、開講した。東京海上日動火災保険の池田博之さんにZoomにて「笑顔の授業」と題し、講義していただいた。

池田さんは失語症当事者で、発症から現在までの経過やその時々への思いなどについて講演活動を行っている。当日はプレゼンテーションに加えてクイズや質疑も盛り込まれ、タイトル通り笑顔があふれる授業となった。学生はモニターに食い入るような目をして話を聴いていた。失語症によって言葉がスムーズに出てこない、言いどくとといった問題があつても、池田さんの想いやメッセージがまっすぐ届く、とても感動的な講演であった。



●外部講師を招いて

その他、池田さんの同僚の田辺和樹さん、鶴飼リハビリテーション病院・言語聴覚士の伊藤梓さんと森田秋子さんにも講演していただき、復職支援について多角的に学ぶことができた。

（言語聴覚学科講師 小森規代）

オンラインで保護者懇談会

大田原キャンパスで保護者懇談会を11月15日に開催した。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、Zoomを利用した実施となった。申込数は全体会が464組、学科別懇談会は475組と昨年度より約80人少ない参加となったが、リモート開催としては予想を上回り、関心の高さがうかがえた。

まず全体会では、新井田孝裕副学長からコロナ禍での授業・実習などの様子が伝えられた。続いて小林雅彦学生部長から、学内の感染予防対策の取り組み、実習前のCOVID-19検査実施の説明、国家試験合格実績や就職状況など大学の現況が報告された。その後、学科別懇談会、個別懇談が実施された。



●Zoom配信の様子

終了後のアンケートでは、オンライン接続や対面についてのご意見・ご要望もあつたが、遠方からも参加可能となったことやコロナ禍での不安が解消されたとの声が多く聞かれ、概ね好評だった。今後の開催についても、保護者のみなさまの声を聞きながら、より良い懇談会となるよう検討していきたい。

（学生課 伊藤史子）

年間成績優秀表彰式を開催

2020年度年間成績優秀賞（大田原キャンパス受賞者）の表彰式を11月18日に開催した。

例年、表彰式は6月ごろの開催だが、今年度は前期オンライン授業の影響もあり、時期を移し、懇談を伴う会食は行わないなど、内容を変更しての開催となった。

初めに表彰式が行われた。本来であれば受賞者1人ひとりに大友邦学長から表彰状が手渡されるが、今年度は受賞者を代表して薬学科6年の高橋健人さんが登壇しての授与となった。高橋さんは今回で3度目の受賞。次に、大友学長から受賞者へのお祝いと激励の祝辞があり、その後の謝辞では、理学療法学科4年の小松京香さんが受賞者代表として、受賞の喜びと今後の医療に携わっていく者としての決意を述べた。小松さんは今回で3回連続の受賞となった。表彰式の後には、出席の学長、副学長、学部長、学科長と共に、学科ごとに記念の写真撮影を行い、和やかな雰囲気では終了した。



●大友学長から表彰状授与

第20回 成田 キャンパスレポート

留学生別科ウェルカムセレモニーを開催

海外から本学への入学を許された医学部奨学生14人が、10月23日、日本語などの補習教育を事前に受ける「留学生別科」のウェルカムセレモニーに臨んだ。セレモニーは、インドネシア、カンボジア、ベトナム、ミャンマー、モンゴルの新入生宅と成田キャンパスをオンラインで結んで行われ、医学部、留学生別科、成田国際交流センターの教職員から温かい歓迎のメッセージが送られた。



●オンラインで歓迎行事に臨む海外からの奨学生と教職員

「ウィズ・コロナ」が合言葉となるなか、外国人の来日要件が一部緩和されたことを受けて、いずれの国からも準備が整った留学生が順次来日。来日後は、感染症対策に必要な手続きを経て、宿舎となる成田国際学生寮に入寮した。

（成田国際交流センター 山本秀也）

解剖体慰霊祭並びにご遺骨返還式を挙げる

11月7日、成田キャンパスにおいて、ご遺族、教職員、学生の参列のもと、今年度の「解剖体慰霊祭並びにご遺骨返還式」が、新型コロナウイルスの感染対策を行ったうえで挙行された。初めに参列者全員で、医学教育および研究のためにご献体された方々に黙祷を捧げた。次に、大友邦学長が追悼の言葉、河上裕医学部長が御礼の言葉、さらに、医学部生が学生を代表して感謝の言葉を述べた。その後、参列者全員が祭壇に献花を行った。引き続き、ご遺骨返還式を挙行し、河上医学部長からご遺族にご遺骨を返還した。



●ご遺族に一礼する大友学長



●学生による献花の様子

最後に、解剖学の小阪淳教授の挨拶により閉会となった。

（総務課 今井康介）

公開講座を実施

成田キャンパスでは、今年度も公開講座を開催し、市民の皆様には、医療・看護・リハビリなどの最新情報をお届けし、ご自身やご家族の健康作りにお役立ていただいている。

第3回 10月20日実施

「身体活動の重要性 その1」高齢者における身体活動の重要性

理学療法学科 西田裕介学科長
竹内真太講師

西田学科長が、現在、日本人の平均寿命と健康寿命の差は約10歳で、健康寿命を損なう最大の原因が脳卒中であることを紹介。これを予防するために日常生活において身体活動量を維持することの重要性を説明した。



●竹内講師による体操指導の様子

これを受けて、竹内講師が、本学も企画・普及に参加している『なりたいいきいき百歳体操』を紹介。歌いながらゆつくりと行う6つの体操のうち、『七夕さま』

に合わせた「腕を横に上げる運動」と、『夏は来ぬ』に合わせて行う「脚の横上げ運動」を参加者全員で体験した。

第4回 11月19日実施

「口腔機能低下を防いで元気に生きる」

言語聴覚学科 石山寿子准教授

加齢にともなう嚥下力や飲み込む力が衰えると、誤嚥性肺炎の原因になるだけでなく、栄養不足による筋力や体力の低下、脳への刺激の減少による認知機能の低下など、全身にさまざまな影響が現れることを紹介した。



●石山准教授による講演の様子

続いて、「30秒間に何回唾液を飲み込めるか」「二息で何秒間発声できるか」などのテストを行い、現在の自分の摂食・嚥下機能の状態をチェックした。さらに喉の筋肉を鍛えるための「おでこ体操」を体験するなど、参加者は自分の身体を使いながら、いつまでもいきいき暮らす秘訣として、口腔機能の維持・向上の重要性を確認していた。

（広報課 金井雅之）

第8回 東京赤坂

キャンパスレポート

第3回 西陵祭を開催

10月11日に東京赤坂キャンパスで大学祭「第3回西陵祭」を開催した。新型コロナウイルス感染症の影響から各キャンパスが開催を中止するなか、学生たちの強い要望から東京赤坂キャンパスのみ開催するに至った。このご時世に大学祭など非常識ではないかという意見もあったが、当日は衛生管理を徹底し、感染者を出すことなく無事に終えることができた。

開催にあたって最も重要視したことは感染対策である。感染リスクを減らすため、可能な限りの対応策を講じ、スタッフは事前に感染対策のスペシャリストである、本学未来研究支援センターの藤田烈講師のレクチャーを受け、感染対策への意識や知



●手話サークルによる手話歌

識を高めた。来場者への手指消毒と検温を徹底し、スタッフにはサージカルマスクやフェイスシールドを配布した。一度触れた備品の消毒はもちろん、常時喚気をし、密にならないよう会場レイアウトを工夫した。

当日は緑日やフリーマーケット、映画の上映や地域貢献活動の発表、手話歌の披露など、さまざまな出し物を企画した。入念な準備の甲斐もありスムーズに運営することができた。大学祭を通して多くのつながりを得られ、それだけでも開催には大きな意味があったと感じる。

今回の開催は、お力添えいただいた先生方、西陵祭実行委員会のメンバー、大学祭開催に協力していただいた各学生団体や地域の皆様など多くの方に支えられて成し遂げることができた。社会が変わっていくなか、私たちは諦めることに慣れてしまっている。西陵祭を通して私は新型コロナウイルスとの新しい向き合い方を知った。ただ反射的に見切りをつけるだけではなく、一度立ち返って考えることが必要だ。実行委員会の活動から得られたものを今後の人生にも役立てていきたい。

(心理学科2年 菊池泰正)



●緑日では射的などを行った

今年度初めての市民公開講座

今年度第1回目の市民公開講座を10月11日、西陵祭の特別講演会を兼ねて開催した。

今回は、メディアにも多数出演している、医学部・大学院医学研究科公衆衛生学専攻の和田耕治教授が「新型コロナウイルスの最新知識とこれからの対策」と題して講演。風邪やインフルエンザとの違いについて、感染者の特徴、現在拡大しているウイルスはどこから由来したのかといった話から、対策に繋がる踏み込んだ内容へと進んだ。感染を防ぐには、3密やクラスターを避けることはもちろん、さまざまな場所でのリスクを考え、「新しい生活様式を実践していくのが大事なこと。ただし、いわゆる「マスク警察」や、感染者を責めることはやめるなど、新しい生活様式に追加してほしいことにも言及し、「自分を守る、相手を守る、思いやりのある生活が目標」と締めくくった。



●公開講座の様子

講演後には質疑応答が予定時間を超えて活発に行われ、参加者の関心の高さを改めて実感した。

(事務部 井上大輔)

大学院オンラインオープンキャンパスを開催

大学院では10月25日、初めての試みとなるオンラインでのオープンキャンパスを開催した。研究科、分野ごとに指導教員と直接相談ができるZoomのミーティングルームを設置し、事前予約制で参加者を募った。

各ミーティングルームでは教員がそれぞれの分野概要の説明を行ったり、ブレイクアウトセッション機能を使ってグループ分けをし、個別相談を行ったりと、従来のオープンキャンパスと同じようなプログラムを実施することができた。また、8月に対面で開催した、大学院オリエンテーションならびに特別講演「研究計画書の書き方」の動画も終日配信を行い、多くの参加者に視聴していただいた。教職員にとっても初めての試みだったので不安もあったが、大きなトラブルもなく、無事に終えることができた。

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、今回はオンラインでの開催となったが、一部の分野では海外から参加される方もいて、オンライン開催ならではのメリットもあった。今回のオンラインオープンキャンパスをきっかけに、1人でも多くの方が本学への入学を検討してくれることを願っている。次年度以降も新しい生活様式に則して、大学院生の募集活動を行っていきたい。

(広報部 齊藤未来)

第53回 小田原

キャンパスレポート

グループ関連病院 合同就職説明会を開催

理学療法学科・作業療法学科4年生を対象とした「グループ関連病院合同就職説明会」を9月2日と9日の両日にわたり学科ごとに分かれて行った。

当日は黒澤和生学部長の挨拶から始まり、森田正治理学療法学科長と藤本幹作業療法学科長から「これからの時代に求められるセラピスト像」について話があった。

その後、グループ施設全体の概要説明があり、熱海病院、三田病院、市川病院、成田病院の担当者から、それぞれの病院の説明や就業状況、卒業生でグループ関連病院に就職し活躍している先輩たちの話を聞き、学生は真剣に耳を傾けていた。

全体説明終了後には、個別相談の時間を設け、学生は各病院の担当者に業務内容や教育・研修制度等について、積極的に質問や相談をしていた。

また、グループ関連病院に勤務しながら大学院に進学する場合に設けられている「大学院奨学金」の説明も行われた。



●病院担当者に積極的に質問していた

説明会終了後、参加した学生から、「グループ内の病院もさまざまな特色があることにあらためて気がつくことができた」「自分のセラピストとしての将来像を考えるきっかけになった」といった感想が寄せられ、グループ関連病院でキャリアアップをめざすことを選択肢として考える良い機会となった。

(学務課 稲葉博之)

年間成績優秀表彰式

小田原キャンパスでは10月10日、今年度の年間成績優秀者の表彰式を第2回教育後援会幹事会で執り行った。毎年、潮風祭(大学祭)で行う「会員のつどい」の際に表彰式を実施しており、多くの会員の皆様に1年間の学習の成果をお披露目している。しかし、今年度は、残念ながらコロナ禍の中で例年通りの開催はできなかった。

始めに、黒澤学部長より、受賞者に対して、温かいエールが送られた。その後、1人ひとりに表彰状と記



●年間成績優秀賞受賞者との記念写真

念品が手渡された。続いて、横島啓子看護学科長、森田理学療法学科長、藤本作業療法学科長の順で、激励のお言葉をいただいた。最後に、受賞者の学生からも1人ひとりの挨拶があり、「この機会がさらに勉強する励みになります」などの話があった。「会員のつどい」は、開催できなかったものの、出席していただいた教育後援会幹事の方々にも、1年間頑張った学生をお披露目する絶好の機会となった。

受賞者は次の通り

- 看護学科
 - 岡本実結(2年)、曾根誠麗(3年)、山口明日香(4年)
- 理学療法学科
 - 江成峻(2年)、林紗穂(3年)、藤田勇輝(4年)
- 作業療法学科
 - 加邊春佳(2年)、関根郁実(3年)、名桐之絵(4年)

(学務課学生係 今井清健)

おだびよサポートチーム活動

小田原市からの依頼で小田原保健医療学部教員が市内の子育て支援センターで活動している「おだびよサポートチーム活動」。活動のきっかけとなったおだびよ子育て支援センターは、10月にオープンした。広域交流施設「ミナカ小田原」へ移転した。このため、移転前のセンターでの活動は9月が最後となった。

そんな最終月は、看護学科の松嶋弥生准教授による「赤ちゃんDAY」個別相談を4組の親子で実施。そのほか作業療法学科の牛腸昌利助教が、今年度から始めたZoomを活用したミニ講座「子どもの褒め方や叱り方」も行った。講座では、わが子と向き合う子育てで避けては通れない内容に積極的に質問が出ていた。スタッフとはこの時期ならではの新型コロナウイルス感染対策の話をするなど、コミュニケーションが深まっていることを実感した。

Zoom講座では10月に看護学科の藤田千春教授による「発達と障害について」も開催した。1人ひとりの成長過程は千差万別と分かっているが、わが子の成長を見守るご両親にとっては気になるテーマに、参加者からは具体的な質問もあった。参加人数が少ないという点はデメリットに感じるが、少数だから気兼ねなく質問できるメリットもあり、お互いの顔を見ながら質疑応答ができて離れている不安を感じなかった。



●藤田千春教授(看護学科)



●牛腸昌利助教(作業療法学科)

今年度は感染対策からZoomを活用した講座に挑戦、またセンター移転と環境変化が著しかったが、今までの実績に今後の活動を積み重ね、どんな状況にも負けないチームをめざしていきたい。

(総務課 伊能理恵)

第44回 福岡 キャンパスレポート

読書感想文表彰式

国際医療福祉大学福岡キャンパス所属の全学年を対象にした令和2年度読書感想文コンクールを、福岡キャンパス図書館で開催した。

このコンクールは2018年から毎年開催されており、今年度は3回目となる。コンクール設立の目的は、学生の読解力とレポート・実習記録の文書作成能力の向上のほか、図書館の利用促進。

今年度のコンクールのテーマは、『音読したくなる一冊』『心に響いた私の一冊』『私が感動した一冊』。図書委員で取り組みやすく自分の気持ちを人へ伝えたいもの、応募作品を選定した。

最優秀賞の受賞者には表彰状と図書カードが贈呈された。

受賞者が読んだ作品は「世界から猫が消えたなら（著・川村元気）」。



●贈呈された表彰状と図書カード

書籍は図書館に配架される予定だ。この本をきっかけに、図書館に足を運び、多くの本から感銘を受け、自らの心と人に気持ちを伝える力の成長につなげてほしい。

（図書館司書 井村晋也）

第1回 就職オリエンテーション

福岡看護学部では9月15日、3年生を対象とした就職オリエンテーションを実施した。就職試験の基本的知識を習得してもらうとともに、社会人としての基礎的能力を自覚し、就職活動に活用してもらうことが目的である。

ゲストに株式会社マイナビの担当者を出し、最新の採用動向や準備について話していただいた。この数年、病院の採用枠が減少しており、特に福岡市内においてはその傾向が顕著であることが数字で示された。また、病院が求める人物像として、①自分で考える力②社会性③第一印象、が挙げられた。いずれも臨地実習を通して研鑽されるものであり、実習直前にこれらの話を聞いたことは3年生にとって非常に有意義であった。

一方で、福岡県内でも新型コロナウイルス感染症患者が増加しているなか、病院合同説明会やインターンシップへの参加も例年通りではないと思われる。新卒の職場は、その後のキャリア形成においてとても重要である。就職活

異文化交流 ランチョンミーティング

福岡看護学部では、学生や教職員が他の国の文化理解を深めることをめざして、「異文化交流ランチョンミーティング」多文化共生社会の推進」を実施している。「留学生が出身国について語る」

「学生が海外へ行った体験談を語る」「学内教員および外部講師が研究や国際協働/協力で海外で活動した内容を語る」という場を昼休みの時間に設け、参加者は昼食を取りながら気楽に聴講するというスタイルだ。

今年度の第1回は、7月24日にZOOMで開催した。成田看護学部とのコラボ企画で、成田看護学部4年生4人が「国際看護研修（発展途上国）優しさ溢れるミャンマー」のタイトルで、ミャンマーの国の概況、保健医療



●発表するリ・カエンさん

システム、看護教育、健康課題、実習施設での学修内容、看護職者の役割等について発表した。40人の学生や教職員が参加し、「海外に行った気分になった」「実際に現地に行くことの価値を感じた」「調べるだけでは知り得ない貴重な情報が知れて意味のある時間になった」などと感想を述べていた。

第2回は、11月18日に対面とZOOMを併用したハイブリッドでの開催。福岡看護学部在籍する留学生5人うちの1人、2年生のリ・カエンさんが、「中国の文化、中国と日本文化の違いについて」のタイトルで発表した。「日本はゴミ箱が道路、公園などいたるところにない」「箸渡しをしてはいけない」に驚き、その理由を調べて、異文化を理解したことについて話した。ZOOMで11人、会場に53人の計64人の学生や教職員が参加した。

発表後、中国の料理、トイレ、恋愛事情などについて質問があり、会場では歓声が上がるほどの盛り上がりを見せた。「思ったより文化の違いがたくさんあり、驚いた」「日本人目線ではなく、中国人留学生が感じる日本と中国の違いについて知ることができた」といった感想が語られた。

（看護学科准教授 森山ますみ）

第59回 大川 キャンパスレポート

年間成績優秀表彰式

大川キャンパスでは、「令和2年度国際医療福祉大学年間成績優秀賞」表彰式が10月28日、行われた。

年間成績優秀賞は前年度の成績が優秀で他の学生の模範となる人物に対し、学費が給付（年間授業料の50%）されるもので、2年生以上を対象に各学科から12人が選出された。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため、秋口の実施となった。セレモニーでは、まず外須美夫副学長から祝辞があり、その後、受賞者が1人ずつ謝辞を述べた。

受賞した理学療法学科2年のHUNG WEICHEN（コウ・イシン）さんは、大川キャンパスでは留學生で初めての受賞となった。



●留學生で初の受賞

医学検査学科3年の鋤崎愛稀さんは、バスケットボール部代表を務めながらの受賞となり、「文武両道を達成できたことをうれしく思っています。これからも努力を続けていきたいです」と笑顔で語った。

3年連続受賞となった作業療法学科4年の笠枝香さんは、「総合実習も終了し、2月の国家試験に向けての勉強をしています。全員合格をめざし、引っ張っていきましょう頑張りたい」と今後の決意を語った。表彰式終了後には、受賞者と副学長、学部長、各学科長による記念写真の撮影を行った。

（学生係 石橋武彦）



●表彰式後の記念撮影

大川市が大学生等を応援する 臨時商品券交付事業を実施

福岡県大川市は、新型コロナウイルス感染症の影響下において、市内の大学生や専門学校生の学業と生活を応援する「大学生等応援臨時商品券交付事業」の実施を決めた。

この事業により、大川キャンパスの学部生・大学院生1139人と大川看護福祉専門学校（学生139人）に、市内で使用できる1万2000円分の商品券「おおかわる券」が交付された。

10月27日には、商品券の交付式が大川市役所で行われ、同市の倉重良一市長、大川商工会議所の津村洋一郎会頭が出席した。交付式では、倉重市長より学生代表の福岡保健医療学部医学検査学科3年生の黒岩晃さん（大川キャンパス学友会会長）に目録が手渡された。

倉重市長からは「今、学生のみならずはアルバイトもなかなかできない環境にありますし、勉強を続けるにも大変な苦労があると考え、おおかわる券の配布を決めました。みなさんが元気に通学されている姿を見るだけでも市民は元氣になります。ぜひこの商品券を学業や生活に役立て、このまちで楽しく勉強を続けてください」と挨拶があった。

また、津村会頭からも、「若い人たちが元気にまちの中を歩いているだけでもいいなと思っておりましたが、今



●倉重市長と記念撮影

年は国際医療福祉大学大川キャンパスに開設された福岡薬学部のみならずも加わり、期待通りにまちに活気が出てきています。学生にとっても大変な時だとは思いますが、どうか、元気で頑張ってください」との励ましをいただいた。

これらを受けて黒岩さんは感謝の言葉を述べたうえで、「商品券は国家試験対策のための書籍の購入等に使用させていただきたいと考えます。私たち学生は、このまちで大川市の皆さんがいつも優しく見守ってくださいているのを感じています。そうした思いや今回のご配慮に因應するためにも、大学でしっかりと知識と技術を身に付け、地域や社会に貢献できる医療人になりたいと思います」と力強く語った。

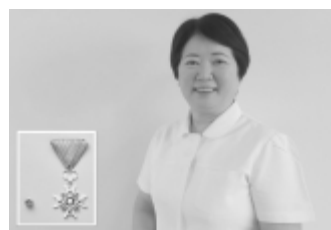
（入試学生募集課 帆足リエ）

国際医療福祉大学病院

大草由美子看護部長が
瑞宝双光章（ずいほうそうこうしょう）を受賞

長年の看護業務への献身と顕著な功績が認められ、本年秋の叙勲で、当院の大草由美子看護部長が瑞宝双光章（ずいほうそうこうしょう）の栄誉に輝いた。

日本DMAT



●大草由美子看護部長

隊員、国際緊急援助隊員でもある大草看護部長は、2005年のスマトラ島沖インド洋大津波、バキスタン大地震の緊急援助隊員として現地に赴くなど、非常に活動的であることに加え、医療現場の問題をいち早く見抜き、その解決策や今後の防止策を次々と打ち立てるなど、速やかな判断と行動力で部下からの信頼が非常に厚い。

たとえば、赴任直後、業務終了後に行っていた看護部の研修を業務時間内に行う、毎週開催していた責任者会議を隔週開催とするなど、働き方改革を形にしたことは記憶に新しい。

また、日々の勤務の一方で、休日には趣味の登山を楽しむなど、オンとオフの切り替えもしっかりとできている。

そのような看護部長の指導のもと、今後ともより良質な患者様本位の医療を提供していきたい。

（総務課 中澤彩乃）

国際医療福祉大学成田病院

シミュレーションセンターを開設

11月3日、教育研修棟3階にシミュレーションセンターがオープンした。「血管インターベンションシミュレーショントレーナー」や「気管支鏡内視鏡シミュレーター」など、より臨床の実務レベルに近いものをそろえ、医療スタッフが日々のトレーニングに活用できる環境を整備。



●シミュレーションセンター

宮崎勝病院長は「公津の杜の成田キャンパス内にも五千三百超のセンターがあるが、臨床現場の医療人にとって近くにこうした環境が存在することは重要なこと。ぜひ、多くのスタッフに活用してほしい」と語る。

シミュレーションセンター長には総合診療科部長の大平善之教授、副センター長には救急科の志賀隆教授が就任。今後、本学の医学部生や初期臨床研修医、看護師などの医療スタッフが活用することで、当院における医療技術の向上につなげていく。

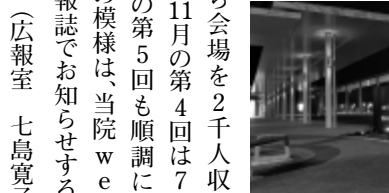


●大平センター長（右）・志賀副センター長（左）

世界糖尿病デーに合わせ
病院をブルーライトアップ

11月14日の世界糖尿病デーに合わせ、11月9日から15日まで、正面玄関付近とバスロータリーをブルーにライトアップした。3月に開院した当院としては初の取り組みに、来院者や周辺の通行者からはご好評をいただいた。今後、毎年継続し、糖尿病の予防・啓蒙につなげたい。

また、竹本稔教授のもと開催が続いている糖尿病教室も、毎回多くの参加申し込みがあることから会場を2千人収容の国際ホールに変更、11月の第4回は70人以上が参加、12月の第5回も順調に申し込みが続く。開催の様子は、当院ウェブサイトや次号の当広報誌でお知らせする。



●病院正面をブルーにライトアップ

国際医療福祉大学塩谷病院

世界糖尿病デー

「第1回市民公開講座」を開催

世界糖尿病デーの11月14日、本年度の「第1回市民公開講座」を塩谷看護専門学校講堂で開催し、講師の山内恵史副院長・糖尿病・代謝・内分泌内科部長が「どうして糖尿病は治療しないといけないのか」

国際医療福祉大学三田病院

専門外来

「遺伝カウンセリング外来」を開始

国際医療福祉大学大学院保健医療学専攻 遺伝カウンセリング分野の西垣昌和教授の力を借りて、来春より専門外来「遺伝カウンセリング外来」を開始する。

当院では、すでに耳鼻咽喉科



●西垣昌和 大学院教授

（聴覚・人工内耳センター）で難聴遺伝子医療に注力しており、この領域における遺伝子検査実施数は日本一。昨年は、遺伝子検査・カウンセリングの成功例として厚労省からのヒアリングを受けるなど、ハイレベルな実績を有している。

今回の専門外来のスタートにより、これを他科、他疾患に拡大していくことになる。

まずは乳がん、子宮体がん、卵巣がんなど婦人科腫瘍を中心に、乳腺センター、女性腫瘍センター、婦人科と連携して診療を開始し、順次、対象疾患を広げていく予定だ。

西垣教授は、看護師・保健師としての国内外の教育・臨床経験が豊富で、認定遺伝カウンセラーとしては、東京大学医学部附属病院、京都大学医学部附属病院、国立循環器病研究センターなどで従事してきた。患者様や臨床の現場を熟知したカウンセラーが、当院の各領域の専門医とチームを連携する。カウンセリングから治療、予防へと速やかにリードし、幅広い領域で遺伝医療に貢献したい。

（総務課）

国際医療福祉大学熱海病院

大規模な災害訓練を実施

当院の災害訓練が11月21日に行われた。昨年4月に災害拠点病院の指定を受けて以来、最大規模の訓練となった。当日は100人の病院職員や、グループ病院から塩谷病院DMAT隊も参加したほか、近隣医療機関からの見学生もあつた。会議室を訓練の本部とし、外来受付付近に指揮所を設置するなど、院内全体を使用した。小田原保健医療学部の学生が模擬患者となり、熱海消防本部の協力で準備していただいた救急車を使って模擬患者の搬送などが行われた。実際に大規模災害が発生したことを想定した内容となり、参加した職員はみな真剣な表情だった。



●救急車からの模擬受入訓練の様子

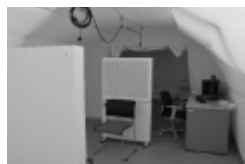
10月22日には、災害訓練の一環として机上でのエマルゴ訓練も行った。本訓練と合わせて本番さながらの実施により、病院職員の災害への意識の向上と情報伝達的重要性を再認識するとともに、地域の中核的病院としての役割が多岐にわたることを認識する訓練となった。

（総務課 村山京二）

国際医療福祉大学市川病院

特設テントで発熱外来を開設

当院では11月16日から、新型コロナウイルス感染症だけでなく、インフルエンザにも迅速に対応するため、発熱外来を開設した。発熱外来は、ウイルス感染のチェックが主な目的で、院内での感染防止を図るために当院敷地内（屋外）に特設テントを設置して診療を行っている。



●発熱外来を開設

来院した患者様は、外来の玄関前で体温チェック。発熱外来の受診が必要なのは、院内に入ることなく発熱外来のある特設テントに案内する。テント内の診察室では、新型コロナウイルス感染症の検査（ランブ法）とインフルエンザの検査を実施し、インフルエンザの検査結果が陽性の場合、その場で抗ウイルス薬を投与する。新型コロナウイルス検査の結果が出るまでに数時間が必要のため、結果を待たずに帰宅していただき、陽性が判明した場合は、迅速に電話でお知らせすることになっている。当院周辺地域でのウイルス感染症の流行防止に少しでも貢献し、院内感染を徹底的に防止するとの思いから、医師や看護師をはじめ病院スタッフ全員で、できることを分担し運営を支えている。

（総務課 地域医療連携推進室 細田幸生）

と題して講演を行った。本講座は、新型コロナウイルス拡大の影響で延期していたが、今回、感染症対策を徹底して開催。61人の参加をいただいた。

講演で山内副院長は、糖尿病と新型コロナウイルスの話をはじめ、合併症・併発症などについて詳しく解説し、早期発見・早期治療が重要であることを強調した。

参加者からは「わかりやすく、とても参考になった」との感想が寄せられた。

講演後には、栄養科の木村祐子管理栄養士が「災害時の非常食の選び方」として、災害に備えておきたい救済食を紹介した。

また、世界糖尿病デーということで、初めてシンボルカラーのブルーで院内のエントランスのライトアップや風船の飾り付けなどを実施。患者様は足を止め、幻想的なブルーの灯りに見入っていた。

今後、地域の皆様に関心のあるテーマで、市民公開講座に取り組んでいきたい。

（総務人事課 荒巻一恵）



●糖尿病デーのライトアップ



●講演の様子

赤坂山王メディカルセンター

地域公開講演会を開催

赤坂山王メディカルセンター主催の地域公開講演会「今後、コロナとどう向き合うか」を10月24日、国際医療福祉大学 東京赤坂キャンパス講堂で開催した。開設後の主催イベント。当日は、100人を超える一般の方に来場いただいた。来場者から講師への質問も相次ぎ、会場は大いに盛り上がった。



●銭谷幹男院長



●松本哲哉主任教授



●藤田烈講師

講演会終了後のアンケートでは、ほぼすべての来場者から「とてもよかった」との感想をいただき、「次回の講演会を楽しみにしている」といった開催の継続を期待する声も多かった。

今後とも地域講演会を開催し、地域に根ざした医療機関をめざしていきたい。

（山王病院 総務課 山本悦子）

折り紙サークル (福岡キャンパス)



こんにちは！福岡看護学部看護学科の折り紙サークルです。2020年に設立された新しいサークルで、大学の講義室を使用し、部員18人で活動しています。私たちは、折り紙を通してさまざまな方とより良いコミュニケーションが取れるようになることを目標としています。

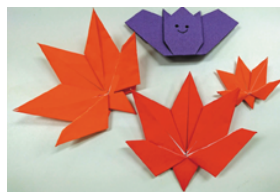
活動の際は、自らの折り紙を持参して、その季節にあった折り紙を作成します。最近では、「秋・ハロウィン」をお題にし、コウモリやオバケ、かぼちゃ、紅葉など、いろいろな折り紙を作りました。上手く折れないこともありますが、部員同士で教え合うことを大切に、コミュニケーションにおいて重要なものを探究し、日本の伝統文化について楽しみながら学んでいます。現在は、感染症対策として、座る間隔を空けたり、オンラインでの折り紙会を実施したりするなど、工夫して活動しています。

私たちがサークル活動で使用するものは折り紙だけですが、折り紙の可能性は無限大であり、たった1枚の折り紙でも部員によってそれぞれの個性が現れ、同じ作品を作成しても、どれ1つとして同じものはありません。作品1つひとつの表情が異なり、完成の喜びや新しい発見を共有することで、多様な学びを得ることができます。また、知らない折り方に対してどのように折る

かを考えたり、色や模様、紙質を変えたりするなど、折り紙を通して創意工夫しながら取り組んでいます。

折り紙はシンプルな活動ですが、昔から続く日本の遊びであり、作業に没頭することによって、集中力を維持し、ストレスの解消になると言われます。折り紙をすることは脳活にもなり、脳の部位を活発にします。後頭葉で目からの情報の処理を行い、側頭葉で色や形を認識し、頭頂葉で形のバランスを立体的に捉え、前頭葉は指先を使う時に必要です。子どもの頃から知っている何気ないものですが、長い歴史、メリットや効果など、折り紙にはいろいろな側面があります。

自分だけの折り紙ワールドを作って、仲間と共有し、人生に彩りを加えませんか？私たちと一緒に折り紙を通して、楽しみながら学びましょう！



福岡看護学部 看護学科2年
松尾沙椰

広報誌 IUHW 123号 発行：学校法人 国際医療福祉大学

【大田原キャンパス】
栃木県大田原市北金丸2600-1 ☎0287-24-3000
【成田キャンパス】
千葉県成田市公津の杜4-3 ☎0476-20-7701
【東京赤坂キャンパス】
東京都港区赤坂4-1-26 ☎03-5574-3900
【小田原キャンパス】
神奈川県小田原市城山1-2-25(本校舎) ☎0465-21-6500

【福岡キャンパス】
福岡県福岡市早良区百道浜1-7-4(1号館) ☎092-407-0805
【大川キャンパス】
福岡県大川市榎津137-1 ☎0944-89-2000
編集：広報部 ☎03-5574-3828
デザイン：野佐デザイン



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

ホームページでもご覧いただけます。
<https://www.iuhw.ac.jp/>

©国際医療福祉大学2020 Printed in Japan 禁無断転載・複写